

## 基礎看護技術習得過程の検討

—— 実習生の実態調査 ——

川崎医療短期大学 第二看護科

宇野 恵子

(昭和60年9月4日受理)

### A Questionnaire Survey on the College Student's Mastery Process of Basic Nursing Skill

Keiko UNO

*Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions*

*Kurashiki 701-01, Japan*

*(Received on Sept. 4, 1985)*

Key words : 基礎看護技術・集中度の分析・臨床実習前・後の達成度

#### 要 旨

看護学生の基礎看護技術習得過程及び、基礎教育終了時における基礎看護技術の達成を知る目的で、3年課程の学生83名、2年課程の学生27名に対し、基礎看護技術項目42について調査し、分析した結果以下のことが明らかとなった。

- 1) 実習終了後、基礎看護技術は、何とかできるに到達している。
- 2) 臨床実習中、全く経験できない基礎看護技術項目があった。
- 3) 3年課程と2年課程では、実習終了時の到達度は大差ないが、習得過程にちがいがみられた。
- 4) 学内実習を体験した基礎看護技術項目ほど上達が早かった。

#### I はじめに

看護教育制度が、みなおされている今日、基礎看護教育で習得するべき、知識・技術・態度は明らかではなく、卒後教育の充実が行われている。これからの医療のなかにおける、看護教育に要求されるものを検討しなければならない時期がきている。

'81年12月号看護展望にて、「卒業後の基礎看護技術習得過程の検討」を卒業生の実態調査か

らまとめた。そのなかで卒業後における臨床経験では、基礎的看護技術の基本は、応用にかわっている。そのため原理・原則にもとづいた看護技術は基礎教育の役割といえる。

基礎看護教育課程のなかでしめる臨床実習からの学びは大きく学生にとって、基礎看護技術習得には欠かせない。

本調査では、実習生を対象に基礎看護技術をどのように習得していくのか、実態を知り、これからの基礎看護教育を考える資料とする。

II 調査の概要

1. 調査の目的

基礎教育終了時における学生の到達度を知る。実習を通して、基礎看護教育の学びの過程を知り、基礎看護技術を習得してゆく現状から、基礎看護教育を考える。

2. 方法

川崎医療短期大学看護学生は、第一看護科、第二看護科の二科がある。表 I のように第一看護科は、2 年次初期に基礎実習があり前期実習、後期実習となる。第二看護科は 1 年次後期に基礎実習があり、2 年次後期中ごろ全実習終了する。これら実習のカリキュラムは、その年度によりことなる。

表 I-1 第一看護科実習計画

(S56年度入学生)

学年次 月	II												III											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
基礎実習	1W (W-40h)												2W 49W 5W (W-36h)											
前期実習	20 休暇												2W 49W 5W (W-36h)											
後期実習	5W												2W											

表 I-2 第二看護科実習計画

(S54年度入学生)

学年次 月	I												II											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
基礎実習	1W (W-40h)												2W 33W 5W (W-36h)											
各科実習	2W												2W											

調査方法は、質問紙を配布し、後日回収する。質問紙は吉田らの調査研究<sup>1)</sup>を参考に「卒業後の基礎看護技術習得過程の検討」<sup>2)</sup>を使用する。

質問紙の回答は、次の 3 段階とする。

- 自信をもってできる …………… A
- 何とかできる …………… B
- とても無理である …………… C

3. 調査対象

対象学生は、第一看護科、昭和56年度入学生、83名、第二看護科、昭和54年度入学生、27名を対象とした(昭和56年度第二看護科入学生は極少数となったため)。

4. 調査時期と回収率

第一看護科

基礎実習終了時 昭和57年 5 月 81名(97.6%)  
 前期実習終了時 昭和57年12月 81名(97.6%)  
 後期実習終了時 昭和59年 3 月 56名(67.5%)

第二看護科

基礎実習終了時 昭和54年12月 26名(96.8%)  
 各科実習終了時 昭和56年 3 月 27名(100%)

III 結果

資料を項目別、個人別に集計し分析した結果次のような実態が見いだされた。

1. 項目別回答の結果(図 I)

1) Aへの集中を中心に

基礎看護技術教育過程にある、3 年課程、2 年課程とも基礎実習終了時、Aへの回答は低かった。最高は、3 年課程11で、24.7%、2 年課程31で26.9%であった。両者において、Aがゼロのものは 3 年課程21項目、2 年課程23項目であった(注:以下本文中において、項目は図 I の番号によって示す。また 3 年課程は 1 N, 2 年課程は 2 N と記す)。

前期実習終了時(1 Nのみとする)100%が A と回答したものはなかった。上位を示したの はやはり11で、66.7%であった。

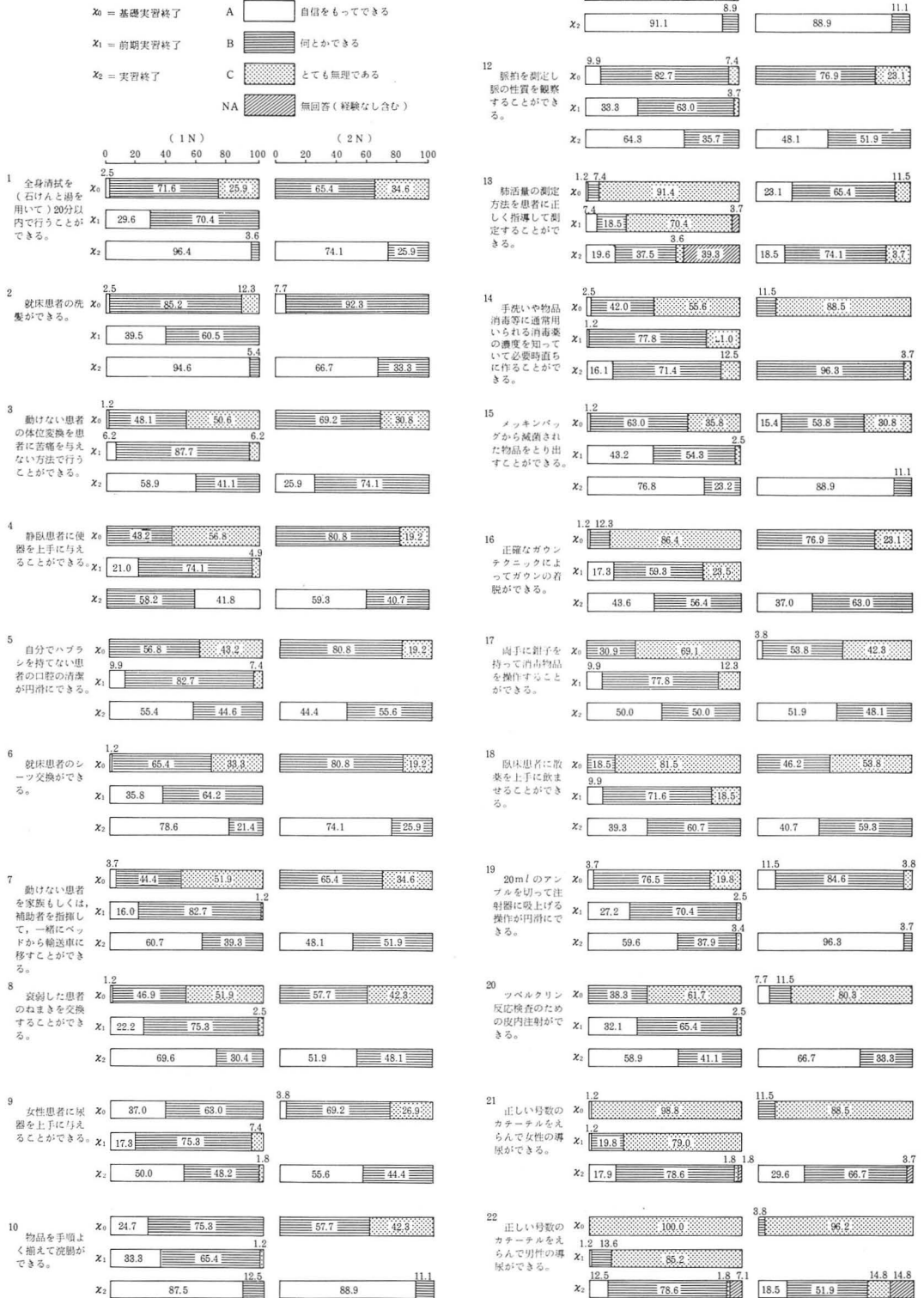
実習終了時100%がAと回答したものはなかった。90%が、Aと回答したもので、1 Nにおいて 3 項目(\*1, \*2, \*11), 2 Nにおいて 2 項目(\*19, 27)であった。(注:\*印はCがなかったものとする)。

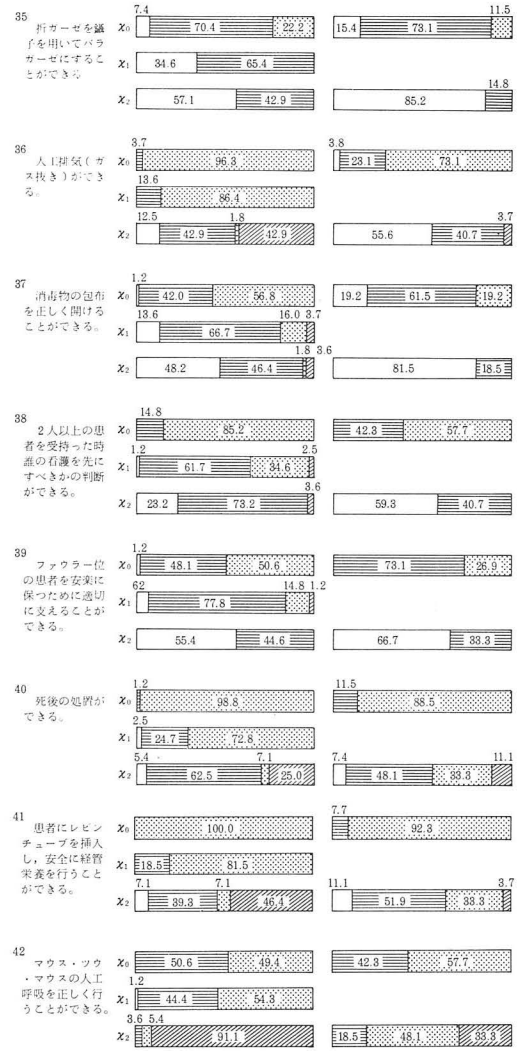
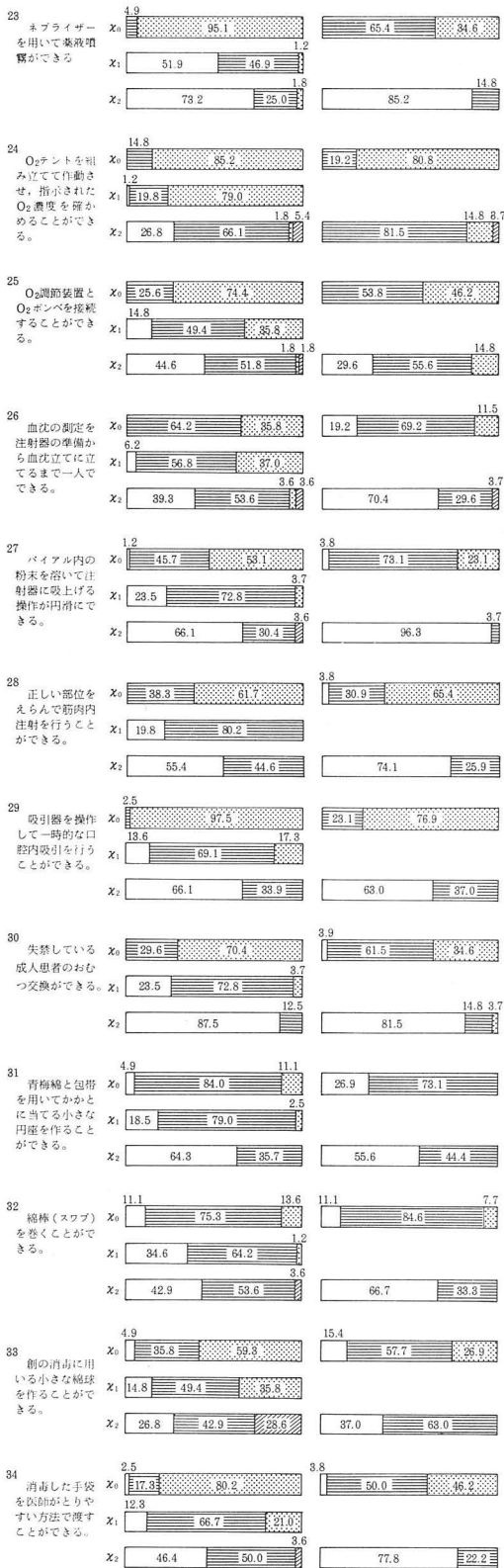
両者とも 2/3 以上がAとしたものは、実習終了時において、1 N-8 項目(\*6, \*8, \*10, \*15, \*23, \*27, \*29, \*30), 2 N-15 項目(2, 6, 10, 11, \*15, \*20, \*23, \*26, \*28, \*30, \*32, \*34, \*35, \*37, \*39), Cは皆無であった。

2) Cへの集中を中心に

基礎実習終了時、100%がCと回答したもので、1 N-2 項目(22, 41)であった。2 Nでは、みられなかった。90%をこえたもの 1 N-6 項目(13, 21, 23, 29, 36, 40), 2 N-1 項目(22)であった。2/3 以上がCと回答したもので、1 N

図 I 基礎看護技術質問項目





－9項目(10, 16, 17, 18, 24, 25, 30, 34, 38), 2N－7項目(14, 20, 21, 24, 29, 36, 40)であった。

前期実習終了時では、90% Cと回答するものではなく、2/3以上がCと回答したものは、1N－7項目(13, 21, 22, 24, 36, 40, 41)であった。

実習終了時、Cが90%をこえたものはなかった。1/3以上がCと回答したものは、1Nはなかった。2N－3項目(40, 41, 42)であった。1Nでは経験することができないため無回答としたものをCに含めてみると、1Nに4項目(13, 36, 41, 42)がみられる。このうち42は90%以上が経験がないとして無回答である。したがって、Aがゼロのもの両者とも1項目(42)

であった。

3) Bへの集中を中心に

基礎実習終了時、90%以上をBと回答したものの、1Nではなかった。2N-1項目(※2)であった。

前期実習終了時では2/3以上がBと回答したものの、1N-19項目であった。

実習終了時に、Bが90%以上こえたものは1Nにはなかった。2N-1項目(14)であった。2/3以上がBとしたもの、1N・2Nともに5項目であった。

4) ABCへの分散を中心に

ABCが各々30%代に分散したものは、なかった。ABC最少の数字が20%をこえたものもなかった。ABC最少の数字が10%をこえたものは、基礎実習終了時1N-1項目(32)、2N-5項目(13, 15, 33, 35, 37)であった。前期実習終了時、1N-6項目(16, 25, 29, 33, 34, 37)であった。実習終了時には両者ともなかった。

5) A+Bへの集中を中心に

表Ⅱ A+B回答の項目数

%	基礎実習終了		前期実習終了		実習終了	
	1N	2N	1N	2N	1N	2N
100	0	3	5	—	22	30
90	2	5	22	—	35	36
66	9	20	30	—	37	37

A+Bでみると、表Ⅱのとおりである。実習終了時における1Nと2Nの基礎看護技術への到達度は大差なく、両者Bへの達成がみられた。1N・2N学習過程における達成は、1N前期実習終了時と2N基礎実習終了時がBへの達成度が同じ程度であった。

2. 個人別の回答傾向の結果

1) 個人別の回答を中心に

すべての項目をAとしたものは、実習終了時において、1N-2名であった。10項目以下をAとしたものは、基礎実習終了時では1N-81名(100%)、前期実習終了時では39名(48%)であった。実習終了時では、3名(5.4%)であった。2Nでは、基礎実習終了時で、25名(96.2%)、実習終了時ではなかった。

11項目以上をCとしたものは基礎実習終了時では、1N-81名(100%)、2N-25名(96.2%)であった。前期実習終了時では1N-63名(77.8%)、実習終了時では、1N・2Nともなかった。

A+Bでみると、実習終了時1Nで100%とするものはなかった。90%-40名、80%-15名、70%-1名であった。2Nでは、100%-1名、90%-22名、80%-4名であった。

2) AとCの項目数の分散について

Aと回答した項目数と、Cと回答した項目数の最高と最低は表Ⅲのとおりである。1Nと2

表Ⅲ AおよびC回答の最高と最低

	1N (81)				2N (27)			
	A		C		A		C	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
基礎実習終了時	6 (32人)	0 (49人)	36 (14人)	18 (12人)	18 (1人)	0 (11人)	30 (2人)	0 (1人)
前期実習終了時	30 (2人)	6 (27人)	24 (1人)	0 (1人)	—	—	—	—
実習終了時	42 (2人)	6 (3人)	6 (17人)	0 (89人)	36 (4人)	12 (3人)	6 (20人)	0 (7人)

Nの回答において、1Nの前期実習終了時と2Nの基礎実習終了時とを、つきあわせれば甚だしい分散はみられなかった。

Ⅳ 考 察

基礎看護技術教育は、一年次に看護総論のなかで看護技術として、看護の基本技術を学習する。本調査では、基礎看護技術について学内での講義の終了した時点为基础実習終了時とし、前期実習終了、後期実習は、実習終了時とした。2年課程は、基礎実習と各論実習のため、各論実習を実習終了時とする。

1. 調査結果より

基礎看護技術の上達は、臨床実習開始から全実習期間にかけて、CからBへの移行がみられた。ABCへの分布を平均割合からみるとAの割合が実習終了時に上位を示し、Cの割合は低くなっている。Bにおいては、顕著な差はない。

3年課程と2年課程の差は、入学時にすでにある。基礎実習終了時における3年課程と2年課程の基礎看護技術の達成状況においても明らか

かに2年課程が高い。しかし、実習終了時到達度は高くない。

「卒業後の基礎看護技術の検討<sup>2)</sup>」では、3年課程の学生が、A……自信をもってできる。と回答する割合が多く、2年課程の学生は、B……なんとかできる。の回答が多かった。本調査では、ABCの回答に両者の差はみられなかった。また、A+Bにおいても、2つのコースに大差なかった。

3年課程・2年課程の習得状況について、A回答からみると、実習終了時100%Aとするものではなく、90%では、1N-3項目(1, 2, 11), 2N-2項目(19, 27)となっている。2/3%では、1N-8項目(6, 8, 10, 15, 23, 27, 29, 30), 2N-15項目(2, 6, 10, 11, 15, 20, 23, 26, 28, 30, 32, 34, 35, 37, 39)以上の項目について、3年課程と2年課程を比較してみると、3年課程では、Aへの達成が高いのは、全身清拭、洗髪、血圧測定である。2年課程では、注射アンプルから注射器に吸い上げる操作、バイアル内の粉末を溶いて注射器に吸い上げる操作、となっている。2年課程では、患者不在の基礎看護技術項目への達成が早い傾向がみられる。また両者とも習得が早いのは、学内実習で体験学習をした項目がAへの達成が早いといえる。これは、Cへの回答からも明らかである。すなわち、基礎実習終了時100%がCと回答する項目は、1N-2項目(22, 41), 2N-1項目(41)である。90%がC回答とする項目は、1N-6項目(13, 21, 23, 29, 36, 40), 2N-2項目(22, 42)である。これら“できない”と意識する項目は、学内実習において、人形やデモンストレーションにての実習であり体験実習の少ない項目となっている。前期実習終了時も同じ傾向を示している(注:体験実習とは患者・看護婦体験をいう)。

実習終了時におけるCについてみると、最高は、1N-42(91.1%), 2N-42(81.4%)両者とも実習中体験できなかったとする。その他では、41(46.4%), 36(42.9%), 13(39.3%), 33(28.6%), 40(25%), 22(14.8%)などの項目が経験できにくい項目となっている。

以上結果にもとづいてみてきたが、3年課程と2年課程の相違は、2年課程では、すでに何

らかの形で技術を学んでいるため、基礎実習終了時、基礎看護技術は高い。しかし、その後の教育カリキュラムのちがいににより、実習終了時の到達は決して高いとはいえない。

看護技術項目の習得状況のちがいを、すなわち「患者不在項目」への達成が早い点については、看護教育の導入時が、診療の介補から学んでいるためと考える。入学時学生の認識調査によると、すでに基礎技術として項目実習は終了している。看護として学習していない点に問題があると考えられる。短大2年での基礎教育のなかで、看護技術をいかに学ばせるか、学内で学んだことが実習の場で実践できることが大切である。簡単そうな技術項目も学内実習で習ったことを、学生個々でとらえた状況・判断によって、看護として学べるプロセスである。基礎技術が実践で患者の安全・安楽を考え患者の立場に立って判断ができたならば、すばらしい看護への学びとなる。

臨床実習の到達目標をどのように考えるか、看護技術をいかに学ばせるか、基礎看護教育の立場から考えてゆかなければならない、今後の課題である。

## おわりに

看護学総論のなかで看護技術として、全身清拭、洗髪、排泄といった基本的な実習は、学生同志で実体験をして病院実習に出る。実習のなかで学生一人ひとりが援助過程を学び、患者のneedに応じる技術、すなわち、看護技術を学ぶことが基礎看護技術である。とするならば、清拭一つにしても、“きれいにする”だけでは看護技術とはいえない。ただの技術に終わる。患者needに対しての援助過程を目標化し、評価することへの限界があると考えられる。しかし、社会・文化構造の変化につれ、看護の中における援助過程での看護技術も、変化してきている。医療の進歩につれ、看護も高度な知識・技術が要求される。これからの医療は、あらゆるチーム医療と協力してゆくために、看護婦の主体性が重要となる。基礎看護教育のなかで看護技術は、学内で学んだ原理と、臨床実習での“なま

の”体験，いわゆる個別的体験を結びつけて学習する。ここに理解と判断への学習がある。その体験を他の患者援助に使用できるような学習過程が大切である。今後こうした点をさらに検討してゆきたい。<sup>6</sup>

## 文 献

- 1) 吉田時子，吉武香代子：看護の基礎教育終了時における看護技術の到達度に関する研究，ナース・ステーション，5(4)，1975.
- 2) 宇野恵子：卒業後の基礎看護技術習得過程の検討，メヂカルフレンド社，6(12)，1981.
- 3) 波多野梗子：看護学教育，看護教育，1984，3.

